

# いじめを受ける子どもの規定要因の検討 —社会的側面からのアプローチ—

眞田 英毅（東北大学大学院文学研究科修士課程 1 年）

teeeruki@outlook.jp

## 付記

本報告の内容は 6 月の東北計量社会学研究会，7 月の東北社会学会での報告をもとに一部を修正・発展させたものです。報告の際には参加されたみなさまから有益なコメントをいただきました。記して感謝申し上げます。ありがとうございました。

## 変数の作り方

### 連続変数

PISA ではいじめに関して 8 項目にわたって問 24 で生徒に質問している。このうち日本では (1) 「悪口を言われた」並びに (2) 「いじめられた」は聞いていない。そのため従属変数のいじめられやすさは、その他のいじめに関する項目（(3) 「仲間外れにされた」，(4) 「からかわれた」，(5) 「おどされた」，(6) 「自分のものを取られたり，壊されたりした」，(7) 「叩かれたり，押されたりした」，(8) 「意地の悪いうわさを流された」）を用いて，因子分析にかけ，因子得点を算出した。因子数は MAP 基準と平行分析の結果から 2 にしてある。因子得点の詳細は以下の通りである。

表 1 因子得点の記述統計量

	度数	最小	最大	平均	標準偏差
男性	2905	-4.24	0.43	-0.23	0.90
女性	2766	-4.10	0.50	-0.26	0.98

個人の SES（社会経済的地位）は Matsuoka（2013）を参考に，両親の職業威信スコアの高い値 (hisei)・両親の教育年数の高い方 (PARED)・家庭の所有財 (HOMEPOS) という OECD が作成した変数を足し合わせている。

親の教育関心の変数は生徒質問票の問 10(1) 「親（もしくはそれに相当する人）は、私が学校でしている活動に関心がある」と問 10(3) 「親は、学校で困難な状況に直面したとき助けてくれる」という質問を使用した。これらの「まったくその通りでない (=1)」「その通りでない (=2)」「その通りだ (=3)」「まったくその通りだ (=4)」という 4 件法の回答を順序尺度として用いている。

連続変数の記述統計量は次のページの表 2 の通りである。

表 2 連続変数の記述統計量

	度数	最小	最大	平均	標準偏差
個人SES (男性)	2905	-52.95	52.68	0.00	18.59
個人SES (女性)	2766	-53.08	47.66	0.00	18.74
集団SES (男性)	2905	33.70	91.59	64.28	9.18
集団SES (女性)	2766	42.60	85.51	64.61	9.43
親の教育関心 (男性)	2905	2.00	8.00	6.55	1.20
親の教育関心 (女性)	2766	2.00	8.00	6.25	1.25

## カテゴリ変数

カテゴリ変数の度数分布表は以下の表 3 の通りである。なお、それぞれ上のカテゴリが 1 を取るようなダミー変数としてモデルに投入している。今回の質問「今朝朝食を食べてきた」に「はい」と答えた子どもは朝食を食べることが習慣化されており、生活習慣や家庭環境が良いと考えられる。このため家庭環境を統制する変数として、モデルに投入した。

表 3 カテゴリ変数の度数分布表

	度数	%
男性	2905	51.2
女性	2766	48.8
朝食を食べてきた	5271	92.9
朝食を食べてきていない	400	7.1
合計	5671	100.0

## いじめられやすさの社会的な規定要因

モデル 1 はヌル・モデルを、モデル 2 は独立変数を投入し、個人 SES にランダム効果をつけたモデルである。

表 4 いじめ経験に関するマルチレベル分析（男性）

	モデル1		モデル2	
	<i>B</i>	<i>S.E.</i>	<i>B</i>	<i>S.E.</i>
固定効果				
切片	-0.23 ***	0.02	-0.47 **	0.16
個人SES			-0.02 *	0.01
親相談			0.07 ***	0.01
朝食ダミー			0.12 †	0.07
集団レベル(n=189)				
学校SES			-0.01 **	0.00
個人SES*学校SES			0.00 †	0.00
	<i>V.C.</i>		<i>V.C.</i>	
ランダム効果				
個人レベル	0.89		0.88	
個人SES			0.00	
集団レベル	0.15		0.14	
相関			0.00	
個人SES集団レベル切片				
deviance	7619.25		7574.13	
AIC	7625.27		7594.13	
BIC	7643.19		7653.87	

$N=2905$ , \*\*\* $p < 0.001$ , \*\* $p < 0.01$ , \* $p < 0.05$ , † $p < 0.1$  最尤推定法

女性の結果は次ページの表 5 に記載してある。

表 5 いじめ経験に関するマルチレベル分析 (女性)

	モデル1		モデル2	
	<i>B</i>	<i>S.E.</i>	<i>B</i>	<i>S.E.</i>
固定効果				
切片	-0.25 ***	0.02	-0.28	0.18
個人SES			0.00	0.01
親相談			0.09 ***	0.01
朝食ダミー			0.11	0.07
集団レベル(n=188)				
学校SES			-0.01 ***	0.00
個人SES*学校SES			0.00	0.00
	<i>V.C.</i>		<i>V.C.</i>	
ランダム効果				
個人レベル	0.96		0.95	
個人SES			0.00	
集団レベル	0.21		0.19	
相関				0.00
個人SES集団レベル切片				
deviance	7723.70		7669.24	
AIC	7729.70		7689.24	
BIC	7747.48		7748.49	

$N = 2766$ , \*\*\*  $p < 0.001$ , 最尤推定法

## 参考文献

- [1] 土居健郎・渡部昇一, 2008, 『「いじめ」の構造』PHP 研究所.
- [2] 伊藤美奈子, 2017, 「いじめる・いじめられる経験の背景要因に関する基礎的研究:自尊感情に着目して」『教育心理学研究』65: 26-36.
- [3] 久保田真功, 2013, 「なぜいじめはエスカレートするのか?: いじめ加害者の利益に着目して」『教育社会学研究』92:107-127.
- [4] 正高信男, 2007, 『ヒトはなぜヒトをいじめるのか: いじめの起源と芽生え』講談社.
- [5] Matsuoka, Ryoji, 2013, "Tracking Effect on Tenth Grade Students' Self-learning Hours in Japan," 『理論と方法』28(1): 87-106.
- [6] 水田明子・岡田栄作・尾島俊之, 2016, 「日本の中学生のいじめの加害経験に関連する要因: クラスレベルと個人レベルでの検討」『日本公衆衛生看護学会誌』5(2): 136-143.
- [7] 文部科学省, 2016, 「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」.
- [8] 永吉希久子, 2016, 『行動科学の統計学—社会調査のデータ分析』共立出版.
- [9] 滝充, 1992, 「“いじめ”行為の発生・推移状況に関する実証的研究: “いじめ”行為の恒常化と加害・被害経験の一般化」『教育学研究』59(1): 113-123.